

博士学位論文要約

尹東柱の脱神話化

－トランスナショナルな視座からの再読－

Demythologizing Yoon Dong-Joo in Transnational Perspective

姜 信和

名古屋大学大学院

国際言語文化研究科

平成25年 6月

1. 目的

本研究の目的は、韓国内のみならず、日本、中国東北部など、国境と民族を跨ぎ越すトランスナショナルな空間において、相互補完的に鼓舞しあう形式で、民族の抵抗詩人と称揚される尹東柱（旧満州・間島出生、福岡刑務所内で獄死、1917-1945）を再読し、その脱神話化を図ることである。

これまで韓国文学の研究体系のなかでは、テキスト外的な情報に過度に依拠した社会思想史的解釈への反省から、内在的解釈を志向した多様な論稿が発表されており、尹東柱研究は相当に厚いものとなっている。

とはいえ歴史的な特殊性からか、抵抗詩人言説はしばしば浮上し、その内在性と外在性の狭間で混乱をきたしてきた。植民地期の犠牲者である尹東柱は、「民族」をめぐるアポリアに嵌り込む危険性を孕んでおり、本研究は従来の過剰コンテクスト化（over-contextualization）（林志弦）の文脈とは異なり、相互補完的な民族主義を鳥瞰する新しい視座から、尹東柱評価の相対化を図った。

本研究は大きく以下の二つ、尹東柱の神話化の両面性、偶像化とその裏側の平凡化という点に問いを立て、そのステレオタイプの言説の解体を目指した。

第一に、偶像化に終始するあまり、指摘されてこなかった詩人の「倦怠」という詩語に着目し、その想念を焙り出す必要はないか。抵抗詩人の修辞に似つかわしくない倦怠の示唆する、社会相関的な意味について検討した。

第二に、民族主義的文脈に集中してきた裏側で対称的に、尹東柱の「なよなよしい」様相を否定し、思春期の幼さであると平凡化するのとは、結局、民族主義的談論と同質の感性ではないか。ときに社会の暴虐を暴いた「ツルゲーネフの窃視」を通じて、尹東柱の官能的なまなざしの含意を評価し、新たな側面を抽出した。

つまり、二極化された固定観念を解体することで、犠牲の「民族」というイデオロギーによって、抑圧の記憶の再生産に寄与させられ、無為に消費されかねない尹東柱の、比較文学的な再評価を行った。

2. 方法

本研究は、抵抗詩人のイメージからは距離があると断定されがちな「倦怠」と「生活」、「窃視」という三つの見地を、既存の言説を相対化できる核心と捉え、研究方法として用いた。

まず抵抗詩人の修辞に似つかわしくない「倦怠」という詩語に着目した。「尹東柱の倦怠」は、意外にもこれまであまり注目されてこなかった。既存の読解が、これらの倦怠の想念を見逃してきたことで、封じ込められてしまった側面は小さくないはずである。

理論上の枠組みとしては、一般的な倦怠論を踏まえた上で、それらを展開するのではなく、尹東柱をはじめとする植民地出身の若者たちと、同時代に東京に暮らした熊谷孝を援用した。熊谷は、自らの世代の問題として、倦怠追求を執拗に行っており、すぐれて教示的である。この場合の倦怠は、自己の感情にひたすら埋滅するものではなく、植民地におけるままならない日常の無為から脱出しようとしてもがく、個々の存在の証しであることを論証した。

つぎに満州に生まれ育ったとはいえ、富裕な名家の子弟として、ともすれば浮き足立つ自分を戒め、尹東柱が生活に密着しようとするなかで、倦怠の様相がいよいよ明るみになる点にも注意を払った。つまり潜在する倦怠の様相が表面上、浮かび上がってくるのは生活の場においてであり、両者は密接不可分であるため、「倦怠」の意味を「生活」という詩語の側からも考証した。顕在化した生活表象を分析することで、潜在する倦怠を焙り出したのである。

さらに「倦怠」や「生活」の諸相に随伴する、尹東柱のまなざしの官能的な側面の分析を試みた。これまでも尹東柱のまなざしは着目されてきたが、その神話化された政治的イメージからか、性的な要素はあまり問われてこなかった。本研究は、性的な視線と性的でない視線を同等に扱い、字面どおり (*literally*) に探求した。

方法としては科学ブームの実証の時代らしい同時代的風潮、生理学的スケッチ (*физиологические очерки*) の流行など、ツルゲーネフとの間テクスト性に鑑みて、とかく性的なものに限定しようとしてきた既存の窃視概念を再検証した。何よりも「ツルゲーネフの窃視」が、農奴制の不正など、圧政をも暴いていたことは示唆的である。それによって、「窃視」が備える複層的な含意を矮小化してきた、従来の固定観念をも問い直した。

3. 概要

以下は章ごとの概説である。

第1章では、メディアや「国語」教育の現場で世襲的犠牲者意識 (*hereditary victimhood*) (Z. Bauman)を増幅させるテクストとして、尹東柱を消費する韓国、漠然とした贖罪意識を緩和する免罪符のように、韓国民族主義的な尹東柱解釈を無自覚に平行受容し、自ら集団的な有罪意識 (*collective guilt*) (H. Arendt)の傘下に逃げ込むことで個々の責任を曖昧にする日本、共産主義的なイデオロギーを加味して尹東柱を称揚し、再受容する出身地の中国東北部における言説形成など、極東アジアにおけるそれぞれの尹東柱受容の問題と、それに対するトランスナショナルな視座からの研究の方向を説明した。

また、尹東柱研究がさかんな韓国の詩史的背景と研究史、および日本における論究を概略した。先述した研究方法の三つの視点についても、概念規定をここで詳述した。

第2章では、「倦怠」の分析を展開した。引用のモザイクとも言うべき尹東柱の作品には、数多くの詩人との間テキスト性が見受けられるが、同時期のアヴァンギャルドの詩人、李箱の吸収と変形もいくつか認められる。尹東柱がモダニズム詩人、鄭芝溶に親和することは理解されやすいが、李箱の辛辣な皮肉と諧謔に満ちた偽悪的な身振りにも呼応していた事実は、一定の示唆を与えてくれる。植民地支配に対する抵抗戦線の聖地とも言われる間島の土壌と、民衆神学としてのキリスト教を基調にした厳しい家風を背景に、名家の長男として、尹東柱は家族間にも葛藤を抱えていた。そうした詩人の詩語、「倦怠」には、家父長制のなかの民族主義的談論と宗主国介在の帝國的なモダニティとの狭間で宙吊りにされた、尹東柱のアンビヴァレントな姿が垣間みられる。そしてこれらの姿は決して例外的なものではなく、むしろ植民地期「インテリ」の類型とも言えるものであった。

具体的には、李箱の詩作品である「こんな詩」の題目をもじった尹東柱の詩、「こんな日」を糸口にする。「もの憂い倦怠」という日本語の既存訳も介在させながら、原語の「澄みわたった倦怠」と「乾いた学課」という詩句を掘り下げた。五族協和の「矛盾」と「倦怠」の実相を、当時の社会背景や教育カリキュラムも参考に紐解いた。

また「倦怠」の様相は、尹東柱の移動に伴って少しずつ変化をきたすのだが、第2章では満州間島と朝鮮京城における尹東柱の「倦怠」について考察し、帝都東京における諸相については、日本での孤独な「生活」の断片から逆照射して分析するために、第3章の中でとり上げた。

第3章では、「倦怠」が「生活」という詩語と表裏一体であることから、内なる「倦怠」を引き受けようと見つめ続ける尹東柱のまなざしが、日常にありふれている「生活」への飽くなき観察と重なりあっていることにも着目し、それらを生活に密着した日常的植民性 (everyday coloniality) (林)の諸相として分析した。尹東柱は老人、若者、こどもといわず、誰もがみな「包み」を抱え持っていると言い、それは「生活の包み」であり、同時に「倦怠の包み」なのかもしれないと語った。尹東柱においてこれらの「包み」は、ありふれた生を普通に生き抜くことの厄介さの包みとなっているが、ここで「生活」という詩語もすべて拾い上げ、そちらの側からも「倦怠」について吟味した。

その上でツルゲーネフの「乞食」のパロディーである散文詩、「ツルゲーネフの丘」に描出された「生活」を追い、それを観察する余計者の「倦怠」の様相について考察した。

さらに冤罪で逮捕され獄死に至るまでの制作で、かろうじて没収を免れた帝都東京時代の5篇の詩作品のうち、3篇について検討を加えた。

残りの2篇については、第4章でとり上げた尹東柱の窃視の対象となった、白いオブジェ群の考察と分けて、第5章に改めた。また第3章の末尾には、生活表象に関連して、創作方法上の間テクスト性をめぐる現段階での備忘録を補記した。

第4章では、尹東柱の「窃視」が孕む多義性について検証した。たとえば「窃視」の様相が顕著な「病院」の語り手は、女の「白い脚」を観察しており、さらに「白い脚」を通して、その向こう側に「死」を覗き見ている。倒錯的なまなざしで女を観察していた語り手は、つぎに自らの境遇を女に重ねるが、最終連で見つめる対象の、主語のジェンダーがさりげなく抜きとられ、語り手と同一化が図られていることに注目した。

加えてこれらのジェンダーのゆらぎを掘り下げ、「病院」と内容が対になっている「慰労」にも、共通して登場する「蝶」を考察した。蜘蛛に肢体をぐるぐる巻きにされた「蝶」のモチーフが、官能性の表象に留まるだけでなく、性的なまなざしに始まり、ついでは死を覗き見て、さらにはすべての死にゆく者のもつ、ままたらぬ本性や、より普遍的な人間社会の暴虐に対する観察へと移行していることを分析した。

さらにどう生きるべきかという問いと対峙し、死と向き合ったテキストとして、「序詩」を再読した。同様の延長上で関連する作品を追い、「性」の向こう側に垣間みえる「死」について考察した。

第5章では、第4章で見た尹東柱の窃視の対象が白い事物たちであることに留意し、「白」に関するオブジェ群について検証した。尹東柱のまなざしは、とかく白衣民族神話と結びつけられ、朝鮮民族の犠牲の物語を増強し、抵抗精神の象徴のように解釈される。しかし果たして、白が民族表象の記号ばかりかという、当然そんなことはなく、語り手は植民地という足下も踏まえた上で、より普遍的な主題を模索している。第5章では窃視が、「性」を通して、「死」と否応なく対峙するなごり惜しい生命の観察へ、逆行している可能性について検討した。

まず「哀しい同族」の白を纏う朝鮮女への「窃視」を通して、植民地の日常の無為に振りまわされる個々人の生き様の空虚さという、より普遍的な軋みに注目した。

つぎに神話に隠されてきた白のモチーフを列挙し考察を加えた。詩作品、「また別の故郷」に登場する三分割する「ぼく／白骨／美しい魂」のうちの、「白骨」を発端に、白いモチーフを網羅し、「白」の表象が、不気味に「死」を暗喩する心象比喩(imagery)となっていることを追求した。

さらに「白い影」の中の「白」が、「死」のメタファーであると同時に、沈みゆく太陽の反射をとり込み自ら光を放つ「白」でもあることに着目し、「白」が逆さに、いつかは死に向き合わざるを得ない「生」を想起させることについて考えた。尹東柱の詩において、夕陽を包摂して輝く空の雲は、黄昏ゆく空の紅い光や闇との対比のなかで、劇的に裏面照射され、まばゆく白い。詩作品、「白い影」と「愛おしい追憶」の「白」を重ね合わせて、分析を試みた。

第6章では本論の整理をするとともに、今後の課題として、日本語や英語などの翻訳を通して新たに発見できる余地が残されていることと、さらなる精読の必要性を論じた。ハイパーテキスト性や尹東柱の自己内部的間テキスト性、李箱にむしろ先行して制作された詩のクロノジカルには捉えきれない間テキスト性、さらには全瑞英が講演中に述べたようなマルク・シャガールとの間テキスト性など、詩文学を超えた横断的な対比研究の論証の可能性についても言及した。

最後に、かつての宗主国としての立場からも、極東アジアにおける相互補完的な民族主義に嵌り込んでではなく、相矛盾するかのような尹東柱の特殊性と普遍性の適切な究明と合わせて、日本における良心的な受容に尽力する責任があると警鐘を鳴らした。

4. 結論

尹東柱の抵抗詩人言説の脱神話化作業において設定した第一の問い、偶像化の問題から距離をとるために、本研究はまず、これまであまり指摘されてこなかった「倦怠」という詩語すべてと、関連する詩作品を分析した。

その結果、満州間島、朝鮮京城、帝都東京への尹東柱の移動と環境の変化に伴って、差異は認められるものの、明白に倦怠の様相が確認できた。これらの諸相は、「倦怠」とパラレルに使用されている詩語、「生活」の側からも網羅的に検討を加えたが、やはり明らかであった。よってステレオタイプの抵抗詩人のイメージは崩れ、偶像化しようとする既存の言説は客観性に欠くものであることが明確になった。

また尹東柱の倦怠追求により、倦怠の様相は日常生活に投げ出された個々人の反射 (reflection) であり、生存のぎりぎりをかけ植民地の現実を生きている証しであったことを論述した。つまり倦怠とは、その言葉が一般に想起させる後退的な含意とは正反対に、時代的、社会的な意味を担っていることを尹東柱の詩分析を通して証明した。

つぎに第二の問い、偶像化とは対称的な、平凡化の問題については、「ツルゲーネフの窃視」を援用し、尹東柱の官能的な様相を分析した。「窃視」の見地から、ほのかに性的な様相を探求した結果、幼さを強調する平凡化にはふさ

わしくない、死に対峙した老翁のような達観した観察が認められた。これにより尹東柱を平凡化しようとする固定観念も、恣意的なものであることが示せた。

合わせて分析の結果、性的なものに限定され矮小化されてきた従来の窺視概念についても、多元的な含意を指摘することができた。

ついでまなざしを追い、観察の対象である白いオブジェ群の分析を深めたことで、それらが官能性の表象であるばかりか、表層の「性」の表象が深層にある「死」と重なっていることを指摘し得た。さらに死の闇から遡行するように白い光を希求し、尹東柱が「生」の様相を描こうとしていた可能性についても提起した。

考察結果を総合すると、尹東柱の「倦怠」と「生活」、「窺視」は、ある程度その射程の輪郭を明らかにできたものと考えられる。すなわち自分のなかに食い込んだ外在性、たとえば植民地主義の影響力を自覚するからこそ、純な何ものかへの内在的な希求が切実になっていったことを示せたものと思われる。そうした詩作品と社会との絡み合った関係性こそ、尹東柱のポエジーの磁場となっていることは論述できた。本研究に残された課題については、先の第6章の概説に述べたとおりである。